博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	池田　瑞穂
論　文　題　目	文化遺産を核とした地域共働の可能性についての一考察 －タイ北部プレー県中等学校における事例を中心に－

審査要旨

本論文は、池田瑞穂氏が 7 年以上の歳月をかけてタイ北部のプレー県で行ってきたフィールドワークの報告と、そうして取得した資料の分析と結果の考察をまとめたものである。池田氏は、青年海外協力隊員として、中南米地域で活動し、その際の任務が地域コミュニティにおける教育であったことから、この論文の発想を得た。イギリスの大学で遺産学により修士号を授与され、その知識を生かしながら、プレー県におけるフィールド調査に入った。

論文の主旨は、タイの遺産保護に関する王国政府の理念と政策と、それに対する地域住民の遺産保護の意識の変遷を検証し、文化遺産が地域のコミュニティで伝承され、再創造されてゆく過程を探求することであった。特に池田氏は学校教育の役割に注目した。また学校教育以外の主体がそうした再創造に関わってゆく様子を明らかにすることにも研究の焦点をあてた。この2点が、本論文の独創的な点といえる。最終的に池田氏は現地の人びとの遺産保護の行為についての検証と分析から一歩進み、今後学校と、地域に生きる人々との遺産保護に関する新たな関係構築の可能性について提言している。こうした提言を含む点は、早稲田大学文学学術院における博士論文としては、他にあまり例のない独創的なものといえる。

論文は第１章から終章まで全７章で構成されているが、内容は大きく分けて5部で構成されている。第１部は第1章で構成されている。論文の導入部として、大きな理論的枠組みの説明と、論文で使われる用語の定義を行っている。ここでの主要な点は、池田氏が以下論文で一貫して主張する地域の住民、学校、そして研究者の「共働」について論述している点である。池田氏によれば、共働とは、住民を巻き込んで彼らを主体的に動かしてゆく作業であり、その中に学校の教員も、外部研究者も含まれるべきであるという。

第2部、すなわち第2章では、遺産に対する多様な考え方がタイに存在することを述べ、しかしそれらがタイ国民国家形成の歴史の中に巧みに取り入れられて、それが学校教育の科目として反映されてゆく様子を述べている。特に歴史と考古学の側面から文化財が文化行政や国家憲法に取り入れられてゆく過程を示している。

第3部は、第3章と第4章で構成されるが、それまで国家レベルで考えられてきた遺産から目を転じて、地域レベルでの遺産のとらえ方に焦点をあて、地域の人々、特に現タイ王国の周辺部に暮らす人々、がどのように地元に伝わる遺産について捉えているのかについての議論を展開している。ここでそうした人々の例として、タイ北部のプレー県の例を導入してくる。そこにおけるフィールド調査を通して、第1部で明らかとなった問題点、すなわちタイ王国の国民国家形成で各地の住民が国家に統合されてゆくものの、もともと異なった王国の一部であった地域における遺産の保護が、こうした公教育の枠組みの中で、どのように影響されてゆくのか、またそれに対して地域の人びとがどのように対応してきたのかについて検証をする目的を改めて述べ、フィールドワークの意義と妥当性を強調している。

第5章と第6章で成る第4部は、フィールド調査の詳細な報告と分析結果についての論述の部分となっている。池田氏のフィールド調査は主に①学校教員への半構造的インタヴュー調査;②教員、生徒への質問票を使った調査の 2 種類で構成されている。対象とした学校はプレー県が中心になっているが、比較の情報を得るため、質問票による調査はタイの首都のバンコックの学校でも行っている。調査の結果、プレー県、バンコックを問わず、調査を行った教員の6割以上が文化遺産についての授業の重要性を訴え、実際に実践的な授業を実施している。加えて、何人かの教員は地域色を生かした教育内容を独自に作っていることが確認されたという。ただ、授業は国家の歴史を教える中に組み込まれている傾向があるという。また多くの教員が遺産教育の不足を訴え、特に地元の人びととの連携を訴え、そうした人々と接触する実習授業の必要性を述べていることを明らかにした。

氏名　池田　瑞穂

第5部として最終章で以下の結論に導いている。①フィールド調査から、タイ王国が国民国家へ体制を変更させてゆく中で、遺産教育が重要な役割を果たした;②そうした中で学校は地域社会が伝統と近代国家建設の要素を横断的につなぎ合わせる役割を担ってきた;③役割を遂行する中で、学校は地域的課題や将来の方向を示すため遺産教育を利用してきた;④しかしその努力にもかかわらず、時間的制約や、資金的な部分でまだ地域との共働は足りていない;⑤そうした部分を補うためにも、外部の研究者も教育機関を通して、学校の努力に報いる必要がある。

＜審査結果＞

審査では、審査員一同、本論文が、遺産教育に注目した点に独自性が認められ、フィールドワークを行った地域への研究成果の還元がよくなされており、研究を通した現地社会や人々への貢献度が大きいと評価した。また、遺産の保護を学校教育の点から論じた研究は、タイの文化遺産研究はもちろんのこと、他の地域の遺産研究でもほとんどない中、貴重な先行研究例を作ったものとして評価した。一方で委員からは以下のような問題点が指摘された。

1. 第一次資料の検索が粗い。例えば日本の文化財行政に触れている部分があるが、もう少し丹念に調べる必要がある。またユネスコの遺産保護の作業指針についても論述が表面的すぎる傾向が見られる。
2. 教員の授業についての詳細な調査は説得力があり、納得できるものの、そうした教育を受けた生徒側の意見がほとんど語られていない。もう少し生徒の考えを論述すべきであったのではないか。生徒側の意見を引き出すため、質問票に現地語を交えるなどの工夫が必要であったのではないか。
3. 自身の研究成果の還元として現地でのワークショップ開催について述べているが、成果が実際に出る前にワークショップを行っているのではないか。また、その部分の描写があまりにも箇条書き的すぎるのではないか。もっと丁寧に説明を試みる必要があるのではないか。
4. 論文の中心テーマの一つが、そこに暮らす住民が維持してきた遺産（生きている遺産）であるにもかかわらず、写真等で住民が示されていない。また住民が持ち続けてきた「従来の知恵」についても、より具体的に述べてゆく必要がある。
5. 学校教育と文化遺産の保存を取り上げたことは評価できるが、それをサポートする文献が足りない。近年そうした研究論文も欧米の研究の中で散見するようになってきている。もっと丁寧に文献を集めて批判的に読み込んでゆく必要がある。
6. 公教育に焦点を当てているが、必ずしも公教育ばかりで遺産教育がなされているわけではない。インフォーマルエデュケーションにも注目する必要がある。またそれと関連して、例えば地元の人びとの精霊信仰と遺産の保護などにも触れておくべきである。
7. 研究成果の還元は必要であるが、一方で研究者がフィールド現地に関わりすぎ、そこの社会の人びとに多大な影響を及ぼし、彼らの自発的な考えまで変えかねない。このバランスをどのように考えるか、言及しておく必要がある。

これに対し、池田氏からは、以下のような回答がなされた。

1. 成果還元については書き足りていない。また現地の言葉で質問しているが、質問票には現地語をもっと入れておくべきであった。
2. 生徒の意見が少ない点について、確かに少ないが、生徒自身が寡黙であまり発言しないため、情報をとるのに苦労した。このためなかなか彼らの意見を聞くことができなかったが、さらに資料を集めるためもう少し粘り強くインタヴュー調査をしてゆきたい。
3. 今回学校教育に焦点を当てたのは、研究者としての自分がフィールドから離れた後、遺産の教育が安定的に継続されることを考え、学校教育の中での活動が重要と考えた。今やプレー県でさえ、家族の間でも

遺産の知識の伝達が行われなくなってきている。その意味でも、学校教育が遺産の伝承に果たす役割が重要と考えた。

4. 成果還元について、地元の人びとにも多様性があり、その多様な人々がそれぞれどのように考えているのか、もっとフィールド調査を続けてゆき、その中で自分の研究が与える影響についても考えてみたい。

以上、問題点もいくつか指摘され、特に全委員が一致して感じたのは、まだ文献調査が不十分であること、一部箇条書きで済ませる部分があるなど、論文の書き方にやや雑な部分が見られることであった。しかし本論文が、遺産保護と教育の問題に着目した点、プレー県というタイ王国の周辺部にあり、かつては別の国に所属していた地域を選んで、自分の仮説を検証してみることに果敢に挑戦した点、そして、結果として自身の研究を還元しながら、遺産保護の考えを地域に人びとに示すことができたという結論が得られた点は高く評価されるべきものと思われた。よって、審査員は全員一致して、本論文は、博士（文学）の学位授与にふさわしい資質をそなえた論文であるとの結論を得た。

公開審査会開催日	2018 年　1 月　13　日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	西村　正雄	文化人類学、東南アジア地域研究	博士（ミシガン大学）
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	寺崎　秀一郎	中南米考古学	
審査委員	東京大学大学院人文社会系研究科・准教授	松田　陽	パブリック・アーケオロジー	博士（ユニバーシティー・カレッジ・ロンドン）
審査委員	早稲田大学文学学術院・非常勤講師	三浦　恵子	社会人類学、遺産学、東南アジア地域研究	博士（ロンドン大学東洋アフリカ学院）